

いま人はどのように死を迎えているのか

— 心に残る「闘病記」 —

大町 公

要 旨

死はいつの時代においても人生の一大事である。かつて、死について、死後の世界については宗教が教えてくれていた。しかし、現代の宗教はかつての時代のように、われわれに対し十分な力を持っていない。死への対処の仕方を誰も教えてくれない今、われわれはどのような死を迎えようとしているのか。

現代は日本人の四人に一人がガンで死ぬ時代である。有り難いことに、多くの人がガンを「告知」されて以来の闘いの記録を残してくれている。文字通り生死を賭けた闘いの報告である。印象に残るものは数多いが、その中から、西川喜作の「輝やけ我が命の日々よ」、千葉教子の「死への準備」日記、原崎百子の「わが涙よわが歌となれ」など特に評判を得たものを取り上げ、現代の日本人は死を前にして何を考え、何をし、いかに死んで行くのかを見、現代日本人における死を検討する。

はじめに

わが国ではガンは一九八一年以来、死因のトップを占め、今では四人に一人がガンで死ぬ。少なからぬ人が「闘病記」を残しているが、印象に残るものも数多い。それらの中から、西川喜作の「輝や

け我が命の日々よ—ガンを宣告された精神科医の一〇〇〇日—、原崎百子の「わが涙よわが歌となれ」、それに千葉教子の「死への準備」日記を選んだ。千葉に関しては、他の作品も参照する。これらは、発表当時いずれも評判を得、今なお広く読まれているものである。

ガンはかかってすぐに死ぬという病気ではない。例外的な場合もあるが、発見されてから死まで、半年のこともあれば一年、二年、……五年、……十年の場合もあり、幸い治癒することもある。その間、再発あるいは転移の可能性がある。患者は常に死を意識せざるをえないのである。ガンという病気は、死までの間の「残された日々」、「限られた生」をどのように生きるかという問いを投げかけてくる。まことに切実な問題であり、生死を賭けた闘いでもある。人々はガン発見をどう受け止め、「残された日々」に何を考え、何をし、どのように死んで行ったのか。彼らの「闘病生活」を見て行くことにより、われわれはいまどのように死を迎えているのかを考えてみたい。われわれの人生もまた「限られた生」であり、本質的にはガン患者と何ら変る所がない。いずれ死を迎えねばならない身だからである。これら闘病記は同じ病を患い途方に暮れている人達だけでなく、われわれ自身の「残された日々」に対しても言わば海図の働きをしてくれるであろう。

一、西川喜作、千葉敦子、原崎百子

よく知られた方々だが、病歴を中心に紹介しておこう。

西川喜作(一九三〇—一九八二)

昭和五年生まれ。国立千葉病院精神神経科医長。

五十四年四月、入院、前立腺ガンの診断を受ける。放射線治療。

六月、カストラチオン(睾丸摘出)。

十月、左大腿骨股関節に転移。入院。

十一月、化学療法。副作用がひどく、翌月、自主的に退院を決意。

五十六年六月、脊椎転移、放射線治療。

八月、肋骨、眼窩に転移、左眼失明。入院。

十月十九日、五十一歳にて逝去。

関係著書は『輝やけ我が命の日々よ』(昭和五十七年、新潮社)、また参考文献として柳田邦男の『死の医学』への序章(昭和六十一年、新潮社、のち新潮文庫)をあげることができる。

千葉敦子(一九四〇—一九八七)

昭和十五年生まれ。東京新聞に入社、経済部記者。四十三年末退社。その後、五十年よりフリーランサー。

五十六年一月、乳ガンのため乳房切除手術。

十二月、乳房再建手術。

五十八年六月、左鎖骨上リンパ節にガン転移(「再発」)、放射線療法。

十二月、ニューヨークに転居。

五十九年八月、胸部リンパ節にガン転移(「再々発」)、放射線療法、その後予防的化学療法。

六十一年十月、縦隔リンパ節にガン転移(「三度目の再発」)、化学療法。『死への準備』日記』の連載を始める。

六十二年五月、小脳にガン転移、放射線治療。

七月九日、ガンの肺転移による急性呼吸不全のため、四十七歳にて逝去。

関係著書は以下の通り。

『乳ガンなんかには敗けられない』(昭和五十六年六月、文芸春秋社、のち文春文庫)

『わたしの乳房再建』(昭和五十七年十二月、朝日新聞社、のち文春文庫)

『ニューヨークでがんと生きる』(昭和六十一年四月、朝日新聞社、のち文春文庫)

『よく死ぬことは、よく生きることだ』(昭和六十二年四月、文芸春秋社、のち文春文庫)

『死への準備』日記』(昭和六十二年八月、朝日新聞社、のち文春文庫、朝日文庫)

『昨日と違う今日を生きる』(昭和六十三年一月、角川文庫)

原崎百子(一九三四—一九七八)

昭和九年生まれ。日本基督教団桑名教会牧師原崎清の妻。

昭和五十三年三月、肺ガン発見される。

六月二十八日、夫より肺ガンであることを告げられる。

八月十日、四十三歳にて逝去。

関係著書は『わが涙よわが歌となれ』(昭和五十四年、新教出版社)、参考文献として柳田邦男の『ガン50人の勇氣』(昭和五十八年、文芸春秋社、のち文春文庫)をあげることができる。

二、ガン発見

西川の場合、昭和五十四年三月十五日、尿閉をきたす。思い当る節はあった。小便の異常には数カ月前に気がついた。「まさか悪性の病気であるとは疑ってもみなかった。」年が明けて、頻尿が著しさを増す。残尿感も出てきた。腫瘍を疑い始める。「とすれば前立腺ガン？ そんな馬鹿な。」医師としての多忙、子供の受験やらで、受診を一日延ばしにしていたのである。当日は勤め先の国立病院で応急手当を受け、翌日、膀胱鏡による検査を受ける。腫瘍があるらしい。

夜、床についたが眠れない。「自分の身の上に取りこもりつつある事態をより楽観的な方向に向けようとしていた。だが、考えをそちらに向けても、心の底にどす黒く生じている不安感を消し去ることはできなかった。」では、彼はどうしたのか。「日記を書こうと思った。日記を書くのは実に二十数年ぶりのことだ。」「何かを書き付けなければいられない衝動が急激に湧き起こったのだ。とにかく書かなければ、記録しなければ生きていく証しが消滅してしまふぞうだ。自分がとんでもない方向に走り出してしまふ恐れがあった。書くことが私を落ち着かせてくれそうな気がした。」しかし、「不安と恐怖に怯えた。何から手をつけてよいのかわからなかった。ノートを開いていても、ただとりとめもない想念がぐるぐる渦巻いているだけだった。」

三日後、尿道と膀胱をレントゲン撮影。どうもガンの可能性が高い。「ガンだ、と思う気持と、いやガンなんかではない、という気持。ここ数日来、私の心はその両極の間を振り子のように揺れ続けていた。しかしいまや揺れ動いていた針はガンであるというところまでびたりと止められたのだ。」彼は「身の引き締まる思いがした。」

その夜、妻と長男に「間違いないガンだと思う。」と報告。

四月二日、バイオプシー（生検）のため入院。検査の結果、前立腺ガン、進行度はステージC、すなわち「転移一步手前に相当」ガン摘出の時期は逸したのである。

千葉は一九八〇年十二月二十四日の朝、偶然、左の胸の上部に「直径一・五センチくらいの非常に固い丸いしこり」を発見。四十路に入ったばかりである。父親が膀胱ガンで亡くなり、母親も十五年來胃ガンを患って闘病生活を続けているので、ガンに関しては医学書を読み、定期的に検査も受け、人一倍注意していた。「予備知識から判断して、まず乳ガンに間違いないと確信した。」「やっぱりきたか、という感じの方が迫ってきて、案外強い衝撃は受けなかった。」「乳房喪失の悲しみなどは全く感じていないヒマがなかった。それよりも、いかにして被害を片方の乳房だけにとどめるか、が最大の関心事だった。」「母親はガンを患ってのちも忙しく仕事をし、充実した日を送っていた。」「こういう母を見ているから、私は乳ガンらしいものを発見しても、動転したりはしなかった。／＼ガンであることが確認されても、すぐに死ぬことはないはずだ。敵をなだめすかしてやっていけば母のように長く生きられるかも知れない。」彼女は「その日のうちに、どこの病院のどの医師に診てもらおうべきかについての調査を始めた。」「翌月の、一月八日に都内の病院で診てもらうことに決まった。それまでの間、乳ガンに関する色々の情報収集を行なった。敵に勝利をおさめるには、まず闘う相手を知ることが第一だからである。よく言われるように、ガン闘病記が「現代の戦記」であるならば、千葉はジャンヌ・ダルクを思わせる。

乳ガンは比較的治りやすいガンとして知られているが、悪質な面を持っており、リンパ腺に転移し、リンパ流に乗って、肺、骨

盤、肝臓、脳に移りやすい。また乳ガンの中には成長の遅いものが多く、何年も、時には十年、十五年もたつて再発する場合もある。決して安心できるような相手ではないのである。

一九八一年。奇しくもこの年は、ガンが日本人の死亡原因第一位になった年であった。一月八日、診察の結果は乳腺腫瘍ガン。「四段階の進行過程の第二期」であった。医師より、「できてから一年以上は経っていますよ。」と言われ、ショックを受けた。十九日、入院。「大胸筋は残すけれども、乳首を含む乳房全体を切り取り、さらに患部の周囲と腋の下のリンパ腺をとり除く手術」。

千葉は根っからのジャーナリストであった。乳ガンとの診断を受けたその日、「これは、天から私に与えられたアサインメント（割り当てられた仕事）なのだ……。」と私は考えた。手術を受けること、片方の乳房を喪うこと、そしてわが身に起こったことを客観的に報道すること。これらはすべて私に課せられた仕事なのだと思う。ちやうど戦争を取材するようにと指示を受けたときのような緊張感と興奮が私を包んだ。」と書いている。

手術後、一週間で退院許可がおりた。病棟での「最短記録」だった。病院は長くいる所ではない。彼女は仕事が生きて甲斐であった。「私にとっては、仕事は苦痛どころではなく、ライフそのものであり、それをとり除かれることの方に苦痛を感じる。だから病魔と闘うときこそ仕事が必要であり、私の精神が生き続ける限り、仕事を放棄することは考えられない。」

「乳ガンなんかには敗けられない」はガンという敵に対する「闘争宣言」であったが、ガンになって一年数か月後出版した「わたしの乳房再建」は、自らの闘争報告であり、ガンと闘う人々に対する熱いメッセージであった。そこで自らのガンとの闘い方をいくつか披露している。

「ガンとの闘いにおいていちばん重要なことは、患者本人が闘う意志を持つこと」である。千葉自身はもっと積極的な姿勢を持っていた。「病気を発見した時に、それを『自』を試す絶好のチャンス」と受けとめ、「困難を一つのチャレンジと受け取り、そこからなにかを得ようという」態度である。

このような基本的態度の上に、病気に対して次のような姿勢をとった。

「ジャーナリストはだれでも、このように自分の身に思いがけず起こった事件から自分自身を救う方法を身につけている。私の全闘病期間（それはまだ続いており、医学上の奇跡的な進歩がない限り死ぬまで続く）を通じてもっとも有効な自己救済法は、病気に対して『書く』ことであつたし、今後もしやうであり続けるだろう。」

「書く」という行為は自分を客観的に見ることを要求する。自分を距離を置いて眺めなければならぬ。病気で苦しんでいる自分から一歩退き、それを観察するという方法である。そうすることによって、単に「病人」であることから救われる。この方法は西川にも後の原崎にも共通しているが、ジャーナリストであつた分、千葉の方が徹底していたと言つてよい。

病に對して、あるいは病む自分に対して、このような姿勢の上に、仕事に打ち込むことである。彼女にとって仕事とは「vocation」であつた。「仕事をどのように続けていくか、が最大の関心事であつた。」

ガンは人生を「限られた人生」に変える。将来を「残された日々」に変えてしまう。果たして人生は長ければ長いほどよいと言えるのだろうか。ここにガン患者達の挑戦が始まる。言わば生の密度、人生の質、今ふうに言えば quality of life という視点から立ち向かう

のである。

ガンを患うということは、何も悪いことばかりではない。「ガンは人生をまたたく間に単純化してくれる。」「自分の人生にとって、なにか大切でありながさうでないか、という選別が非常に明確になったのである。」ガンを患ったことによって、人生についての新しく、より深い見方が開けてくるのである。西川の場合はこうであった。

「……ガンを意識し、生を意識することは私の目を大きく見張らせる。今日を、この今を精一杯生きるんだぞと自分に言いまかせるには効果的だった。」

草木の一本一本、人々との触れ合いのなかの一言一言に人生の幸せを感じるようになっていた。一期一会の緊張感を知った。私はこれから残された人生を命の限り充実したものにしようと思決心した。」

西川は「今を精一杯生き」、「人生を充実したものに」するために選んだのは、今まで通り精神科医としての仕事を続けることであった。外来患者は一日に四十人から六十人。その外に、毎週金曜日の夕方には、上尾市にある病院へ、ナイトホスピタル、ナイトクリニックに通っていた。市内にもナイトクリニックをかかえていた。精神科の患者というものは、退院し職場や学校に復帰してからも長くアフターケアを必要とするからであった。

三、再発あるいは転移

西川は十月初め、定期検査でのレントゲン写真撮影で、ガンが骨盤（左大腿骨股関節）に転移したことがわかる。大きな衝撃であった。ガン患者にとって、ガンの再発ないし転移は、あるいは治癒するかもしれないという淡い期待をその根底から揺るがすことになる。

西川は書いている。

「ガンとわかってから、いずれ転移する日がやってくると覚悟していた。覚悟してはいたものの、カストラチオンまでして我慢に我慢をかさねてきた私にはいざ転移が現実のものになると、世の中から見捨てられたという気がした。この苦しみ、この悲しみ。それは誰にも、恐らく妻にさえもわかってもらえないだろう。果てしない絶望感におそわれる。」

その強靱な精神力には、感服せずにはいられない千葉でさえ、「八三年六月にがんが再発したとき、私は世界が崩壊した、と感じた。もう私の人生は終わったのだ、と思っただ」と書いているのである。この「絶望感」をいかにして克服するか。「残された日々」がどのようなものになるかは、ひとえにこの闘いにかかっている。この点では西川は運がよかった。

十月十五日、入院した日、誰かが西川に読ませようと考えたのか、医長室の机の上に雑誌『文芸春秋』が置かれ、その表紙に「ガン50人の勇氣」と印刷されてあった。西川はこの柳田邦男のレポートにひきつけられ、一気に読み終える。西川は「五十人の方々のガンに對する生き様、死に様を知らされて、私に無かった数々の経験や精神的葛藤、死を前にしての素晴らしい輝きの一瞬の光、そして又死を迎えながらライフワークの実現に、完成に、全力を振りしぼって来た方々の姿」に痛く感動した。とりわけ、原崎百子が好んだという「たとえ世界が明日終りであっても、私はリンゴの樹を植える」という言葉に共鳴し、国立がんセンター研究所長村村隆の「死とは、その人の人生が短期間にどう閉じられるか（インテグレート、集積）されて出てくるものではないか」という言葉に励まされ、力づけられる。西川は日をおかず柳田に手紙を書き、後に二人の付き合いが始まるのである。

入院しての治療は約一カ月後となり、仕事に復帰する。西川の場
合、入院といっても自分の勤務する病院であり、入院しながら勤務
を続けた。一日中ベッドの上にいることはまれであった。「外来診
察は私にとって生きる糧であった。」「患者を診察できるのが、こん
なにも嬉しく、こんなにもやり甲斐があるとはと、今さらながらに
思いをあらたにする。」柳田も「患者さんが待っているから」とい
うのが、西川先生の口ぐせだった。」と書いている。

十一月十二日より入院、一クール九週間の予定で、抗ガン剤の点
滴治療始まる。副作用が思いのほかである。食欲がない。ひどい倦
怠感。氣力が湧いてこない。主治医に相談すると、「それでは一週
間おきに一回ということにしましょう」と言う。それだと、一ク
ール終えるのに四カ月以上もかかってしまう。西川は苛立を押えるこ
とができない。十二月三日、四十九回目の誕生日に、西川はついに
重大な決意をする。

「いまの私にはこの三カ月、この四カ月が大切なのだ。将来三年
なり四年なり働けるという生命の延長がこの抗ガン剤の点滴で約
束されるならともかく、そんな保証のないまま黙って三カ月、四
カ月とベッドのなかで時間が過ぎてゆくの耐えられそうもない。
この三カ月、いま働ける四カ月を大切にしたい。」

やりかけた研究、これから新たに始めたい勉強そしてたくさん
の患者。それらが私を待っている。私はきっぱり抗ガン剤の点滴
をやめて退院することを決意した。」

「やりかけた研究」とはライフワークである「分裂病者の研究」、
「これから新たに始めたい勉強」とは「死学」とでも言うべきもの
で、「ガンを宣告された自分でなければ学べない領域」であり、「ガ
ン患者の心理、死への不安、その不安を乗り越えるまでの葛藤、死
と宗教、死と哲学、死と医療のあり方」などについての勉強である。

主治医に報告するだけの「一方的退院」は、医者としての常識を
逸脱するものであったろう。もはやガンから逃れることはできない。
一種の開き直りでもあるが、こうして「ガンとの共生」の日々が始
まる。ガン患者の最も充実した日々はここから始まるのかもしれない。
い。

一方、千葉はほとんど病院にいなかった。「この三年半、病人ら
しくしていた日は、ほんの数えるほど。最初の手術のときは、不本
意にも二週間、入院させられたが、再発時の治療は、二カ月間、通
院で受けた。今回は、二日間入院して手術を受け、あとは通院で治
療してもらっている。」と書いている。「今回」とはガンの「再々発」、
胸部リンパ節への転移をさす。ガンは「別に養生したからといって
よくなる病気ではない」というのが彼女の信念であった。

西川の言わば自主的退院に対応するのは、千葉の場合、長年の夢
であったニューヨーク行きであろう。千葉は一九八六年十月一日、
上智大学の教授であり神父でもあるアルフォンス・デーケンに請わ
れ、彼の「死の哲学」の一環として、上智大学で特別講義「死への
準備」を行なった。千葉は「わたしの乳房再建」以来、デーケンの
論文に深い共感を示しており、絶筆「死への準備」日記」のタイ
トルも、この講演の題も、氏の提唱する「死への準備教育」を念頭
に置いたものであろう。そこで自身を振り返り、こう話している。

「自分自身の死がそんなに遠くないかも知れないと考え始めたの
は、八三年の再発のときです。手術でガンが全部取れなかった、
ということが分かったわけです。……

そういう、あまり遠くないかも知れない死の可能性を知って、
どうしたかといいますと、まず、そのときに計画していた、ニュー
ヨークへの引越しを実現しよう、という決意でした。」

彼女もまたこの時「がんと生きる」ことを真剣に考えていた。が人は闘う相手ではない。「乳ガンなんかに敗けられない」「ガン」が、「ニューヨークでがんと生きる」の「がん」へと変わるのも、それを暗示しているのかもしれない。彼女はニューヨークでがんと二人三脚を決意するのである。

千葉はこの間のことを自らの経験をふまえて次のように言っている。

「ふつうのがん患者にとって、最初の治療のあと、再発するまでの期間は、充実した人生を送るべき、最も大切な時間なのだ。それは、数カ月かもしれないし、数年かもしれないし、十年を超える時間かもしれない。この期間にがん患者であることを自覚し、自分の人生から下らぬものを排除して、本当に大事なことにだけ時間を使うという習慣を身につけてしまえば、再発、再々発に見舞われても、それほど慌てなくてすむ。」

「再発」に見舞われて「慌て」るかどうかは、ガンが発見されてからの生き方にかかっている。ガンであることがわかれば、「がん患者であることを自覚し、自分の人生から下らぬものを排除して、本当に大事なことにだけ時間を使」い、それを「習慣」としなければならぬ。

西川も転移前の生活をできるかぎり維持するという形で、国立病院勤務は言うに及ばず、研究、「死学」の勉強、学会報告、講演活動に精を出してきた。しかし、闘病生活二年を経た今、背中と腰の痛みが激しい。五月に院長に話すと、入院して麻薬による痛み止めを受けるよう勧めるが、「しかし、それをやって寝込むと全ておわりそうなので……」と「言葉をはかす」す。月末、思い切って診察してもらおう。六月に脊椎にガン転移、八月には肋骨、眼窩に転移した

ことがわかる。目が疲れる。頭痛がする。吐き気が起る。もはや立っていることもおぼつかない。患者を診察することができないのである。八月十四日、「今日限りで診療できなくなるのではないかな。不安と痛恨の念が湧き上ってくる。涙がとめどなく流れてくる。」

ひるがえって考えてみれば、人生とは常に有限なものであって、そのことは何も「ガン患者」に限ったことではない。われわれの人生もまた限られており、よく言われる例だが、「ガン患者」が言わば「死刑囚」であるとすれば、われわれは「無期囚」にすぎないのである。われわれが「闘病記」を読んで感動するのは、人生という同じ土俵にいるからであるが、にもかかわらず、その生活が格段に真剣であり、充実しており、輝いてさえいるからである。生活の密度、質に驚くと同時に、自らの日常生活に深い反省を強いられるのである。しかし、いまや彼らの闘いも最終段階にさしかかる。死がいよいよ現実性を増してくるのである。

西川と千葉については見てきたが、ここで原崎にも登場してもらわねばならない。闘病生活はガンのできる部位によっても異なるし、種類によっても変わってくる。進行のステージによっても異なる。千葉の場合は六年七か月、西川の場合には二年七か月であったが、原崎百子の場合にはそれよりはるかに短い四十四日であった。

夫の「闘病経過―まえがきに代えて」によれば、彼女は前年の春頃から体に異常を訴えたが、病院に行ったのは一年後の三月九日。すでに「右肺のみならず左肺にもガンが点々と転移」していた。絶望的である。当初、妻には真実を告げなかった。六月に東京の「癌研」で「新しい療法」を試みたが、結果は空しかった。その翌日、六月二十八日、夫は真実を告げる決心をする。「詳しい症状は一切省略して、ただ君は肺ガンなのだということだけを告げた。」「彼女は自分の現状の一切を了解した。」と夫は書く。彼女は前年、同じ

く肺ガンを患い半年間にわたる闘病生活のうえ亡くなった教会役員
の看病をしていたので、その推移については熟知していた。彼女は
「驚くべき冷静さと、更には感謝すら述べて、私の言葉を受け入れ
た。」その夕方には、日記帳を二冊買って来てくれるよう夫に頼み、
その日から死に至るまで夫宛てと、子供宛てに書かれることになる。
もちろん人目に触れることを想定したものではない。夫は死の数日
前までその日記のことを知らなかった。八月十日逝去。わずか(と
言ったいのかわからないが)四十四日間の闘病生活であった。

四、死の受容

原崎の場合、第一日目にガンの告知も、その再発も、死の受容も
とにかく引き受けねばならない問題が一挙に襲いかかってきたと言っ
てよい。彼女の「四十四日間」にはすべてが凝縮された形である。
いや、その短い期間に何としても答えを出さねばならなかった。そ
の日の日記は「今日という日を、つまり『一九七八年六月二十八日』
という日を、ここに明記しておきたい。今日は私の長くはない生涯
にとって画期的な日となった。私の生涯は今日から始まるのだし、
これからが本番なのだ。私は今本心に正直にそう思っている。」と
いう言葉で始まる。

「それでもやはり私はリンゴの樹を植える。」手記と共に有名な
なったこの言葉は、彼女が若い頃から好きだったらしい。物静かだ
が、確固とした決意を余すところなく伝えている。続けてこう書く。
「昨日、『明日やろう』と決めたこと——二郎に助動詞を復習してや
ること、忠雄の勉強の相手をする——をやっばりやりましよう。」
彼女は四人の子の母であった。

「新しい一日が始まった。」という出だしの翌日の日記でも、「やっ
ておきたいこと、やりたいこと。」と見出しをつけ、その最後に

「いつも通りの『お母さん』でいよう。」と書いている。「できるだ
け多くの時間を愛する者たちと過ごせるよう、時間を大切にしよう。
本当に必要な人と、本当に必要なことだけを語り、体力の消耗を少
なくしよう。」

六月三十日、早くも自らの「使命」を見出ししている。彼女は書く。
「……これから私のしななければならないことが徐々にはっきりして
きた。神さまはもう一度私を用いようとして下さっているのだ。伝
導者として生涯を全うするチャンスの主は再び私に与えようとして
おられる。」その「しななければならないこと」とは、夫の言葉を借
りれば、「……自分をかくも豊かに生かし給う主キリストの恵みと、
実際自分でも思いもかけなかった今ある平安とを、少しでも他人に
証し」することであった。

七月一日、夫清が朝の「家庭礼拝」で読んだ「詩篇」六二に深い
共感を示す。彼女の心は揺れ動いていた。しかし信仰は揺るぎない
ものであった。これは何ら矛盾することではないことを教えられた
のである。

「わが魂はもだしてただ神をまつ。

わが救いは神から来る。

神こそわが岩、わが救い、

わが高きやぐらである。

わたしはいたく動かされることはない。

……

この詩を、「ああ神さま、私のすべてをこぞ存知の神さま、主に依
りすがりながらもなお私の心は揺れ動くのです。時には不安に戦ま
し時には悲鳴をあげ、そしていつもいつも涙が流れます。でも神さま、
あなたがいて下さいますので、そして岩のようにしっかりと私を根
底から支えていて下さいますので、このように弱い私も決定的に揺

り動かされてしまうことはないのです。」と解釈し、「これは私の今の思いそのままのだけれど。」と書いています。

「神さま／地上での生活に、また今日も一日を加えて下さいました。この一日はあなたから賜った、かけがえのない一日でございました。」七月二十一日、呼吸は少しずつ苦しくなっている。酸素ボンベを手放すことができないが、彼女は毎日そのように生きていた。

七月三十日。主の日。彼女は礼拝に歩いて行くことができない。歌うことも、唱えることもはやでなくなつた。《わが礼拝》と題された詩である。

「わがうめきよ わが讚美の歌となれ

わが苦しい息よ わが信仰の告白となれ

わが涙よ わが歌となれ

主をほめまつるわが歌となれ

……………

八月三日後、入院。八月五日、初めて日記を夫に見せた。亡くなる五日前である。夫は次のように感想をしたためている。

「正直おどろきだった。押え難い感動がみるみる心のうちに拡がっていった。そして、『よし、これなら死んでもいい』と思つた。」

死に際して、妻はすでに牧師としての自分を必要としない高みに立っている。あとは夫としての役割を果たすだけだと思ひであったのだから。その夜、様態悪化。翌日、死の四日前に書かれたものだが、以下は彼女の絶唱と言う他はあるまい。

「神さま／出来ないことがどんどんふえています。トイレまでも人の手をかりることになりました。息も自分の力だけでは出来ません。四六時中、酸素ボンベにビニールの管でつながれています。神さま、まるで仔犬のようでございます。時々キャンキャンふう

ふう言うのまでも。でも神さま、目が見えます。耳もきこえます。字もかけます。口で歌えなくても頭と心とでさんびかが歌えます。風も心地よいと感じられます。人のやさしさをうれしいと思えます。冷たい麦茶もとても美味しくいただきます。考えられます。感謝できます。祈れます。『あ、り、が、と、う、ご、ご、い、ま、す』と、区切りながら言うことが出来ます。時がわかり、日がわかります。今日は八月六日。そして主の日です。」

彼女は自分の死が間近いことを感じていたからでもあろう、自らの「しなければならぬこと」を無事果たせようだとの喜びにあふれ、こう続けている。

「神さま／私は生きております。こんなにも充実して。神さま、何よりうれしいのは、神さまを信じ仰ぐことが出来ることです。イエス・キリストの道を、私も生命をかけて進みゆくことが出来ることです。」

八月九日。「四十四年生きてきて、とても面白かった、楽しかった。でも、どこかでいつも真面目に生きてきた。／結婚してからも随分忙しく働いたみたいだけど、どれもいつも楽しんで働いてきた。だから本当に幸せでした。／みんなを心から愛しています。」という言葉（夫による口述筆記）を最後に日記は終わっている。そのほぼ半日後、彼女は帰らぬ人となったのである。

話を千葉に戻すが、彼女は先の講演の中で、ガンの「再々発」の時の心境を次のように話している。

「八五年の夏に再々発の治療を終えるころから、死への準備という問題を、いろいろ考えるようになりました。……
そういうことをやっても、別に悲しくなったり、寂しくなったりはしないのですね。どうしてなのかな、と考えてみたのです

が、まず、私自身は、自分の人生にかなり満足している、ということが挙げられます。……ほかの人からみれば大したことはないかも知れませんが、私自身はできるだけのことはやってきたな、という実感が強いのです。……

つまり、どの時代に生きてても、完全な人生というものはないし、また同時に完全な死というものもなくて、平凡な表現ですが、与えられた環境でベストを尽くすしかないのだということです。それで、私はこれまで、失敗はいくつもあったけれど、自分の力でできる範囲の挑戦はずっとしてきたといえるし、今後もそうするつもりだし、だから、いつ人生が終わることになっても、そんなに後悔の念に襲われることはないのではないか、という感じがしているのです。」

「私自身はできるだけのことはやってきた」、「自分の人生にかなり満足している」、「死への準備」にあたって、「別に悲しくなったり、寂しくなったりはしない」。人間は「与えられた環境でベストを尽くすしかない」。私は「自分の力でできる範囲の挑戦はずっとしてきたといえるし、今後もそうするつもりだ」。だから「いつ人生が終わることになっても、そんなに後悔の念に襲われることはないのではないか」と言うのである。思うに、彼女にとって、人間が死すべき存在であるという認識は、いかに生きるべきかを考える上で出発点にすぎなかった。人間にとって不可避な、運命としての死はすでに受け入れ済みの問題なのである。彼女にとって「死の受容」は、この時期改めて問題とはならなかった。残る問題は、与えられた生命を精一杯生きることだけであった。

一九八六年十月より、『死への準備』日記を同時進行のかたちで「朝日ジャーナル」に連載を開始するが、以上のことを念頭に置けば次の文章も理解しやすい。

「だいたい、私は六年近くまえに癌にかかって以来、自分の病気のことで泣いたためしなど、ただの一度もない(友人を癌で失ったときには、ちょっと泣いたけれど)。感傷に浸っている時間などはありはしないのだ。肉体的な苦しさに歯をくいしばって耐えている時間以外は、どうやって残された時間を意味あるものに使うか、だけを考えてきた。」

「どんなに死への道が苦しくても、私は私らしく苦しみたいと思うのだ。神という絶対的な存在を信じない私にとっては、死にゆくことも生きることと同様に私自身の試練の過程だと考えている。自己に忠実に生き、自己に忠実に死にたい。」

「……目下のところ、私は『死を見つめる』よりも、『死ぬまでをどう生きるか』のほうにずっと関心がある。」いかに彼女らしい姿勢で、病む自分を報道し続けた。七月七日、「体調悪化し原稿書けなくなりました。／多分また入院です。申しわけありません。」とファクシミリで発信したのを最後に、翌々日早朝、ガンの肺転移による急性呼吸不全のため逝去。

自らを「センチメンタリズムに無縁」で、「徹底的なりアリスト」と呼んだ千葉の闘病記には、「死の受容」の問題は見当らない。これは希有のことではないだろうか。多くの人にとって、死を前にして自らに死を納得させるのは容易なことではあるまい。

西川は闘病二年目の秋、ラジオたんぱの「医学講座」での対談を行なった。相手は千葉県がんセンター診療部長で外科医の大森幸夫氏、タイトルは「ガン患者の心理」であった。そこで西川はキューブラー・ロスの「死に行く過程のチャート」に対する異論を述べ、「ちようと海岸に打ち寄せる波が寄せては返すように、ショックがわーっ」と押し寄せてきたり、それが引いて、覚悟をしなければいか

んと思ったり、そういうことが何回も繰り返す。何と云いますか、非常に激しい苦行をしながら、自分を削り、経験し（やがて）まあ死も仕方がないということになって受容していくのではないのでしょうか。私は、まだそこまで行きませぬけれど。」と話している。

「闘病記」は八月二十日から口述筆記となっているが、それも三十一日で終わっている。次は「闘病記」の最後の部分である。

「私は、いまま少しも死を恐れていない。死と対座する自分の心にやすらぎさえ持ち始めている。死を見つめる己が心をいとしいと思う。何故にこうも死を恐れなくなったのだろうか。

多くの欲望を失い、発病前までは人一倍生への欲求に満ち満ちていた私が、ここまで辿りつく道は長かった。とはいえ、再び死の不安に怯え、死への恐怖におののく日が来ないとも限らない。」この間、西川の内面にどのような変化があったのだろうか。

五、信仰について——あとがきにかえて——

原崎はキリスト教の信仰を持ち、揺れ動くことはあったが、根底においてはしっかりと支えられて亡くなった。死をひかえた者にとって、信仰ほど心強いものは他にないだろう。難しいのは信仰を得ることであり、さらに難しいのは、原崎を見てもわかるように、その信仰を持ち続けることである。

西川はどうだったのだろうか。西川も信仰に近づいていたと思える節がある。内面的には受け入れるだけの素地はできていたと言うべきであろうか。

闘病二年目の二月八日に、スリランカで友人を訪ねたあと、バスツアーの際「ある寺院の薄暗い本堂」で、一人の僧侶から「あなたには仏のココロがある」と言われ、「信仰心を持たない私に仏心があると言われていささか面くらう。」ものの、「正直のところこのバ

スツアーでたくさん寺院を見て廻りながら、いつのまにか心のふるさとにやって来たような不思議な安らぎを感じていた。」と書いている。

また、四月二十三日には、西川の「自主的退院」を支持してくれた、信頼する女医斧氏について、「斧医師はカトリック信者である。穏やかで強くしかも心優しい。信仰がそうさせているのだろうか。この頃、私もふと入信しようかと思うことがある。」と書く。

『輝やけ我が命の日々』は八月三十一日をもって終わっており、その後の西川については柳田の『「死の医学」への序章』に頼らざるをえない。それによれば、九月三十日、死のほぼ二十日前になるが、医局時代の先輩、精神科医の倉田医師が見舞いに訪れる。彼は学生の時以来結核を患い、長い闘病生活を送り、「何度も生死の境をさまつた」経験を持つ。西川は記録のために発病後、来訪者の会話を録音していた。

「……死ぬことは、先生、怖くないですよ。もう、ちっともこわくないですよ。死の不安というものは、ぼくはないんですよ。……先生、結核やって重症になって……」と言う西川に対して、

「ぼくも、唇に水をぬられたからね……」

「(そのとき)死っていうことを考えられたんでしょね」

「当然でしたね」

「自分の命が、次の世の中に生きて行くことは……来世もあると……」

「ぼくは一度も考えたことはないですよ」

「強かったんですね」

「ぼくは、だけど強い人間じゃないですよ。強いといえは、先生のほうがずっと強いですよ」

実際にテープを聞いている柳田は、「ぼくは一度も……」と「強

かったんですね」の間に、「倉田医師がきっぱりといったものだから、西川医師は驚いたように」と説明を入れ、「……先生のほうがずっと強いですよ」のあとには、「西川医師は、少し話題を変えた。」と書き入れて、引用を続けている。

西川はここで、倉田医師から、「来世」あるいは「次の世の中」について何らか肯定的な答えがほしかったのではないか。自分の漠然とした期待に同意が得られると思っただけではないだろうか。「強い人間」であるかどうかといった次元に話が行ったのは、予期したものと答えに開きがあったからであろう。

「わたしの乳房再建」の「解説」で、記者仲間であった藤原作弥は、デーケンが千葉に講演を依頼しにニューヨークを訪れた時のことを書いている。公園をいっしょに歩きながら生と死の問題について話し合い、デーケンの「死の間際に何を希望するか」という問いに対して、千葉は「モーツァルトを聞きたい」と答え、「モーツァルトなら死んだあと、天国でも聞くことができますね」と言うのと、「黙って微笑み返した」だけだったという。千葉は「唯物論者」を名乗っていたが、それは「合理主義、科学主義、実証主義を尊重する考えであり、無神論者という意味に聞こえていた。事実、死後の世界はない、と言い張っていた。」と書いている。しかし藤原は、昭和五十七年八月九日上智大学の、かつて千葉が講演したその教室で行なわれた「千葉教子を偲び、生と死を考える会」で、「故人の生前について語った知人友人の話聞きながら、私は果してそうだったのだろうか、としばし考えてみた。」と訝しげなのである。

彼女の闘病を支えていたものはいったい何だったのだろうか。具体的な信仰でないことはもちろんだが、何も信じていないとは言いがたいのである。では何なのか。「与えられた生(命) に対する限り

ない慈しみ」、とりあえずそう言うておくことにしよう。

先に登場いただいた藤原は自らの闘病記「聖母病院の友人たち」の「聖母病院創立五十周年式典—あとがきにかえて」の中で、「肝障害」で聖母病院に入院中、シスターや看護婦の生き方に感銘を受け、毎日曜日ミサに出席するなど一年間キリスト教に触れたが、信者になるところまでは行かなかった。「今後とも私たちはおそらく信仰の入口にたたずんでいる群衆の一人であり続けるだろう。信者にはほど遠い、共感を覚える程度の『シンパ』にしか過ぎず、その信仰心もカトリック、浄土真宗、曹洞禅いずれにも通ずる曖昧な祈りではある。日本のクリスチャンは人口のパーセントに満たない九十七万人と言われるが、私たちは残りの九九パーセントに属しながら、時折り何処かで無定型な祈りを捧げている筈である。」と書いている。示唆に富んだ一節である。なぜ「共感」を覚え「『シンパ』」にまではなるにもかかわらず、「信仰の入口にたたずんでいる」だけで終わってしまうのか。それにもかかわらず、なぜ「入口にたたずんでいる群衆の一人であり続け」、「信仰心」を持ち、「時折り何処かで」「無定型な祈りを捧げ」るのか。

ここにはわが国における特有の宗教事情があるように思える。信仰の決断を容易に許さない状況である。既成の宗教で言うならば、千葉はもちろんのこと、西川も信者とは言えない。しかし西川はもちろん、藤原も訝しんだように、千葉もまた宗教的でないとは言えないのではないか。キリスト教でもなければ、仏教でもなく、神道でもないが、そのいずれの要素もあるといった「信仰心」である。まことに「曖昧」で、「無定型な」「祈り」ではあるが、まぎれもない「祈り」である。この有様は、宗教という点で、われわれのいかにも「曖昧」で「無定型な」内面を写し出す鏡でもあろう。

できれば、そのような内面を丸ごと引き受けた「生死観」をまと

めたいというのが、筆者の「限られた人生」における主要な課題である。

注

- (1) 『輝やけ我が命の日々よ』、二二頁～三三頁
 (2) 同書、二九頁
 (3) 『輝やけ我が命の日々よ』はこの日記をもとに、闘病最後の年昭和五十六年五月から七月にかけて、約三カ月で書かれたものである。
 (4) 同書、二九頁～三一頁
 (5) 同書、三四頁～三六頁
 (6) 年に関して西川は昭和を、千葉は西暦を使っている。引用等に関する便宜上、筆者が取り上げる際も、統一せずそのままの年を使用した。
 (7) 『乳ガンなんかには敗けられない』、一〇頁～二三頁
 (8) 同書、四一頁
 (9) 『わたしの乳房再建』、三三頁
 (10) 『乳ガンなんかには敗けられない』、四三頁
 (11) 同書、一四八頁
 (12) 柳田邦男著「自分の死を創る時代」(文芸春秋社刊『同時代ノンフィクション選集第一巻』所収)、三〇頁
 (13) 『わたしの乳房再建』、二二九頁
 (14) 同書、八〇頁
 (15) 同書、三〇頁～三一頁
 (16) 同書、一三三頁
 (17) 同書、一三五頁
 (18) 『輝やけ我が命の日々よ』、四一頁～四二頁
 (19) 西川によれば、ナイトホスピタルは「入院患者が昼間は働いたり通学していて、夕方病院に戻ってから治療を受け、翌日再び働きに出か

けたり学校に行くという治療システム」、またナイトクリニックとは「昼間会社や学校に行っていて夜病院の外来に来て面接、薬物投与などを受けるシステム」である。

- (20) 『輝やけ我が命の日々よ』、七八頁
 (21) 『ニューヨークでがんと生きる』、一七頁
 (22) 『輝やけ我が命の日々よ』、七頁
 (23) 同書、八五頁
 (24) 同書、一一一頁
 (25) 同書、八頁
 (26) 同書、一〇八頁
 (27) 同書、一一〇頁
 (28) 同書、五五頁～五六頁
 (29) 『よく死ぬことは、よく生きることだ』、八七頁
 (30) 『私の乳房再建』、一三三頁
 (31) 『よく死ぬことは、よく生きることだ』、三八頁
 (32) 『ニューヨークでがんと生きる』、一五一頁
 (33) 『輝やけ我が命の日々よ』、一八七頁
 (34) 同書、二二三頁
 (35) 『わが涙よわが歌となれ』、八頁～一〇頁
 (36) 同書、一四頁
 (37) 同書、一五頁
 (38) 同書、二三頁
 (39) 同書、二二頁
 (40) 同書、二九頁
 (41) 同書、三三頁
 (42) 同書、三五頁～三六頁
 (43) 同書、七七頁

- (44) 同書 一〇二頁
 (45) 同書 一一二頁
 (46) 同書 一一六頁～一二七頁
 (47) 同書 一一七頁
 (48) 同書 一二九頁
 (49) 『よく死ぬことは、よく生きることだ』、四〇頁～四二頁
 (50) 『死への準備』日記、二二頁～二三頁
 (51) 同書 三二頁
 (52) 同書 五〇頁～五一頁
 (53) 同書 一九六頁
 (54) 心理学者柳川光章は千葉の死を悼み、「死なざるは生くるにあらざと
 外つ国に闘い逝きぬ勤(つよ)きいのちは」と詠んだが、こよなく自
 立を愛した彼女にとって「外つ国」アメリカ、それもニューヨークこ
 そ心の故郷であつたらう。
- (55) 『死への準備』日記、五二頁
 (56) 同書 五〇頁
 (57) 『死の医学』への序章、一三三頁
 (58) 『輝やけ我が命の日々よ』、二二三頁
 (59) 同書 一六八頁
 (60) 同書 一八二頁
 (61) 『死の医学』への序章、二五七頁
 (62) 『わたしの乳房再建』、二四五頁～二四六頁
 (63) 『聖母病院の友人たち』(文芸春秋社刊『同時代ノンフィクション選
 集第六巻』所収)、三九九頁

Comment les Japonais vont-ils mourir maintenant?

—des livres de la lutte contre le cancer qui demeurent dans ma mémoire—

Isao OMACHI

Résumé

La mort est toujours un grand événement dans la vie. Autrefois la religion enseignait la mort et l'autre monde. Mais la religion de notre temps n'a plus suffisamment d'autorité comme celle d'autrefois. Maintenant qu'il n'y a personne qui nous enseigne à nous préparer à la mort, comment allons-nous mourir?

Actuellement au Japon un homme sur quatre meurt d'un cancer. Beaucoup de gens morts d'un cancer ont écrit des livres de leur lutte contre cette maladie.

Il y en a beaucoup dont je me rappelle, mais j'ai choisi les livres de Kisaku NISHIKAWA (psychiatre), Atsuko CHIBA (journaliste indépendante) et Momoko HARASAKI (femme de pasteur).

Lisant ces livres et voyant à quoi les japonais pensent actuellement en face de la mort, ce qu'ils font et comment ils se préparent à mourir, on peut comprendre la signification de la mort pour les japonais actuels.

